工藤健志　青森県立美術館

かつて本屋へ行くことは僕にとってごく当たり前の日常であった。30年ほど前、学生の頃に住んでいた大阪では阪急古書のまちで好きな作家の初版本を探すのが毎週末のルーティーン、京都に行くと必ず恵文社一乗寺店に立ち寄っていた。青森に赴任してきた当初も、東京に行けば神保町を散策したり、わざわざ中目黒のCOW BOOKSまで足を延ばしたり。そんな本屋との出会いで一番の思い出は金沢のオヨヨ書林。店頭に置かれていた『月刊 朝日ソノラマ』（懐かしいソノシート付の雑誌!）に目を奪われ（相当買い込んだw）、古民家を活用した雰囲気のある店内に入ると、思わず「うわー」と声をあげそうになるくらい、僕の好みの本がずらっと並んでいるではないか! 本屋ってのは「知」が集積しているという点においてひとつの「人格」と言えるが、さすれば突然理想の女性が目の前に現れたことになり、当然の如くぼくはすぐさま恋に落ちてしまった。「これは持ってるぞ」、「これ欲しい!」、「きれいな装丁の本だなあ」などなど、本との対話によって知的好奇心が満たされていく、まさしくデートの時間そのものであった。それから金沢に行くときは21世紀美術館よりオヨヨ書林にいる時間の方が確実に長くなっているけど美術館より楽しいんだから仕方ない（笑）。ついでに言えば、僕の好きな柴田聡子さんがここでライブをやっていたことを後で知って、やっぱり僕の直感に間違いはなかったな、と妙なところで納得した次第。

ちょっと前置きが長くなってしまったけど、僕の考える「いい本屋」とは、その土地の個性に根差しつつ、確固とした美意識のもとに選ばれた本が並んだ場所に他ならない。「知」の充満した空間にゆったりと身を置くことの精神的快楽。ネットが普及し、家にいながら何でも買える時代になったけれど、それで完結してしまうと、だんだんと視野が狭くなり、価値観も凝り固まっていく。やはり街を歩き、店を訪ね、モノを手に取り、そして人と会話しながら、思考や感情に柔軟さを与えていく体験って大切なんだと思う。だから僕は、八戸に来たときには精神の運動のため、ここ八戸ブックセンターに必ず立ち寄ることにしている。きちんとセレクトされた本が並ぶ「いい本屋」は、特に目当てのものがなくても店内を散策し、面白そうな本、装丁やデザインで気になった本のページをパラパラとめくるだけで脳細胞が勢い活性化していくような感覚を得られるからだ。そんな「いい本屋」があれば、そこは間違いなく「いい街」である。そして「いい本屋」ができれば必ず「いい街」になっていく。本屋は、その街の環境とそこに暮らす人たちの感性や知性を象徴的に示すところなのだから。

こんな素敵な空間で僕はこれまで何回か話をさせていただく機会を得た。本に囲まれた空間

で、美術館や展覧会の話ができるのは学芸員として最高の幸せだし、まるで茶話会のようにみんなが近い距離で場を共有できるのも個人的にはとっても心地いい。惜しむらくは昨年夏に予定していたタイガー立石展のトークが新型コロナ感染症拡大のため中止になってしまったこと。展覧会は終わってしまったけど、タイガーさんは絵本や漫画の仕事もたくさん手がけたアーティストなので、いつかまた機会を与えていただければ、と思っています（ダメ?）。

工藤健志　takeshi kudo

青森県立美術館

アカデミックトーク「もっと知りたい！ 青森県立美術館」（2019）、「青森県立美術館『富野由悠季の世界』解説」（2021）など

1967年福岡県出身。大阪教育大学美術教育学専攻造形芸術学専修終了。1993年田川市美術館（福岡県）学芸員。1998年より青森県立美術館の開館準備を担当し、2006年の開館より学芸員として勤務。近年手掛けた展覧会は「大・タイガー立石展」（2021）など。